

# ひいふる2



## People to People Aid

### 草の根援助運動

発行人 武中秀允 山中悦子

編集人 運営委員会編集部

235-0036 横浜市磯子区中原 1-1-28

TEL 045-772-8363 FAX 045-774-8075

E-mail p2aid@angel.ne.jp

URL www.angel.ne.jp/~p2aid

No.32 1999年11月10日

# アグス・ムリアワン

P2 インドネシア現地連絡員

## 東ティモールで殺害される

アグス・ムリアワン（26歳）は、インドネシアのNGOと草の根援助運動（P2）との連絡員として活躍する一方、通信社「アジアプレス」のジャーナリストとして東ティモール取材していました。9月29日の新聞でこの訃報を聞き、草の根援助運動は、ショックと深い悲しみに包まれました。

### 事件

私たちは29日付の新聞で事件を知った。草の根援助運動の現地連絡員でインドネシア人のアグス・ムリアワン（26）は殺された。彼は通信社「アジアプレス」のジャーナリストとして、今年2月より東ティモール取材していた。

8月30日に東ティモール独立を決定する住民投票が行われ、圧倒的多数の住民が独立を支持した。ところが、その後、独立に反対する併合派民兵や、国軍離脱者などが、虐殺、破壊略奪の限りを尽くした。危険を避けるため山に逃げた住民は食糧を調達することができず、栄養失調のため死亡する人もでた。BBC、CNNなどの主な報道機関も撤退する中、アグスは取材を続けていた。

9月25日アグスは、東ティモール東部バウカウのローマカトリック教会関係者とともに、ロスパロスにいる避難民に食糧や医薬品を届けるための調査に同行した。帰り道に13名の併合派民兵の待ち伏せにあったのだ。一行8名は全員射殺され遺体は川に投げ込



まれた。その後も民兵がいたため、遺体回収もままならなかったが、翌日午後、フィロロにある教会系の農業学校関係者によって遺体は回収された。損傷がひどかったため、フィロロの農業学校に埋葬された。

これらの事実は事件後、現地に入ったアジアプレスの野中氏によって確認された。アグスからの最後の連絡は「あと1日か2日ここにいた後、いったんバリに戻る」というものだった。事件の前日にアジアプレスの野中氏が受けている。

## P2とアグス

アグスと草の根援助運動との関係は95年合化労連のスタディーツアーの際に通訳を依頼したことから始まる。ガジャマダ大学の学生だった彼はプロの通訳よりはるかに流暢な日本語を使っていた。96年には東京大学に短期留学生として来日する。彼は日本語の論文を読みこなす能力も身に付け、米軍占領下の沖縄を研究テーマに定める。

97年12月、スタディーツアーで再び通訳として活躍してくれたアグスは、私たち草の根援助運動の活動をよく理解し、丁寧な通訳をしてくれた。ツアー中、彼はビナスワダヤツアーのジャロット氏より依頼されてツアーのマネージメントもこなしてくれた。木彫りグループのポンドクティンキルの工房で彼は、ワヤン(影絵)人形をうまく操っておどけて見せた。



97年スタディーツアー参加者とアグス(左)

ツアー中、私たちは、インドネシアの人々のこと、社会のことなど事あるごとにアグスに質問した。アグスは、日本社会のこともよく知っているのので、いつも的確に説明してくれた。このツアーを通じて彼は草の根援助運動のよき理解者となってくれた。

### 激動の中で

ツアー直後に通貨ルピアの暴落があり、それをきっかけにインドネシアは深刻な経済危機に陥る。私たちはアグスからのEメールを通じて、生の情報を手に入れることができた。そして、彼はP2のスタンスをふまえて、LKP2というNGOを紹介してくれた。LKP2はガジャマダ大学の学生を中心に活動をしている小さなNGOである。貧困地区の農民を支援している。彼らは決まった収入源をもたず、メンバーが路上でサテ(インドネシア風焼き鳥)やTシャツを売って活動資金にあてているという。98年夏に私は、アグスと共にLKP2のフィールドであるポンチョサリ村を訪れた。そのLKP2のメンバーはとても誠実そうな人々ばかりで、さわやかな印象であった。

### Agusの訃報に接して

1995年10月、インドネシアの地でAgusと出会った。

彼は通訳として、私はボランティアと模索する団体として。

当時彼は学生であったが、本業の通訳がお手上げになるほど日本語が堪能で、幅広い知識の持ち主であった。また、生真面目な反面、ユーモアも兼ね備えていた。

正義感という言葉はAgusのためにあるのかも知れない。彼の正義感が「事実と事実として」多くの人に伝えたいがために報道の道と選べた。現実とよりリアルに伝えるためにカメラマンとして取材をしてきたのだと思う。また、瞬間、瞬間にすべてと賭け、写真を通じて多くの人に現実と伝えなかったのだろうか。

あまりにも短い人生であったが、彼が残した多くの事実は、永久に残るものと信じている。

彼が残したものは写真ばかりではない。彼に接した多くの人は、彼の優しさ、人なつっこさを忘れないだろう。



1995年ツアーにて



日本留学中のアグス  
箱根一泊旅行

合化労連「バギ会」の中川庄司氏よりお手紙をいただきました。バギ会は95年ツアー参加者によって結成されました。

アグスは、98年4月に学生のデモが活発化したころからその写真を撮り始めた。彼は写真と解説を電子メールで送ってくれた。迫力あるその写真はテレビニュースでみる炎よりも、学生たちの真剣な眼差しを写していた。かれはそのときにアジアプレスの記事と出会い、アジアプレスの仕事をしていくことになる。デモの写真ばかりではない、経済危機で増えたストリートチルドレンにも目を向けていた。98年10月学生のデモが再び活発化する。彼は取材を続けた。雨の中、抗議の行進、高速道路の路面にはだしの足だけが写る写真は特に美しかった。彼は常々インドネシアの庶民はだまされやすい人たちだと語っていた。民主化を求めて警官に立ち向かう学生の姿に自分の姿を映していたに違いない。撮影する行為は、この激動の時に立ち会った

25歳のアグスが、それを記録し、自分の意識の中に明確に留めたいという意思の表れだったのだろう。

99年彼はP2の現地連絡員となり、草の根援助運動とインドネシアのNGOの連絡に奔走してくれた。一方で、アジアプレスの一員として、東ティモールでの取材を始めた。彼が撮影した映像は、NHKのドキュメンタリー番組にも流れた。99年夏のスタディーツアーは東ティモールの住民投票の時期と重なってしまったため、アグスと会うことができなかった。ツアーに彼が参加できなかったのはP2にとって損失だが、後にとって大きなチャンスとなる事だと考えた。8月23日、ジョグジャカルタのホテルで受けた電話が、彼の最後の声だった。

(楠美 繁)

草の根援助運動は10月5日、日本政府とインドネシア政府に向けて下記のような抗議声明を発しました。

インドネシア共和国ハビビ大統領 殿

草の根援助運動 共同代表 山中悦子 武中秀允

#### 抗議声明

あなた方は今、インドネシアから遠く離れた日本で多くの市民が若く有能な一人のインドネシア人の突然の死に大きな衝撃を受け、涙を流してその死を悼んでいることを知っているでしょうか。

彼に死をもたせられた東ティモールの事件、それは9月25日の夕刻に起こりました。彼、アグス・ムリアワン(Agus Muliawan 26才)は日本の通信社、アジアプレスのジャーナリストとして今年4月から東ティモールを取材中でした。その彼はローマカトリック教会関係者など8名と共に東部コム近くを車で移動中に攻撃を受け死亡。遺体は川に投げ込まれさらにひどい損傷を受けました。

日本の私たちが新聞で「インドネシア人ジャーナリスト」の死を知ったのは9月29日の新聞報道によります。悪い予感通りそれが私たちの本当に大事な友人アグスだとわかったのは翌30日のことでした。私たちは今、この憎むべき犯行が国軍の手によるものだと報道されていることに大きな憤りを覚えています。カトリック教会の人々を独立派=敵とみなし標的としてしていた残留派民兵なるものは、国軍の別動隊であると認識する私たちですが、今回の犯行が国軍・745大隊そのものによるものであったとの報道がなされるに及んで言葉もありません。東ティモールの治安維持に責任を負うことを怠ったインドネシア政府に強く抗議します。さらにはこの事件の一日も早い真相解明と犯行当事者の逮捕、厳重処罰を求めます。そしてそれらの事実関係を私たちの前にすべて明らかにすることを要求します。

私たちは日本の小さな国際協力NGO・草の根援助運動のメンバーです。私たちは約6年間にわたってあなた方の国のいくつかのNGOや住民組織を支援しながら多くの人たちと交流し信頼関係を築いてきました。アグスとは1995年、スタディーツアーの通訳をもらったことを機に知り合いました。彼は大変有能な向学心あふれる若者ですぐに私たちの活動を正しく認識しよき理解者となりました。そしてこの春から草の根援助運動現地連絡員になってくれました。

私たちは彼の死はインドネシアと日本両国の将来にとって大きな大きな損失であったと考えます。これからの時代は国を超え人々が相互に理解し合い協力し合いながら共に生きる時代です。そうした時代にアグスは重要な役割を果たし得る人だったのです。そんな彼を殺したことをあなた方は是非悔いてください。そして今後さらなる犠牲者を生まないように国軍を東ティモールから即刻撤退させてください。私たちは東ティモールの平和とインドネシアの民主化の実現をもってインドネシア政府がアグス・ムリアワンに対する罪の償いとすることを求めます。

「私たちは、インドネシアで最も魅力的な若者だったアグス・ムリアワンのことを永遠に忘れません！」

# アグスが語るインドネシア

アグス・ムリアワンはインドネシアが激動の時期を迎えた 98 年から、民主化の動きや、経済危機に苦しむ人々を写真に収めていました。紙面でその一部をご紹介します。

アグスの活動をより多くの人に知ってもらうことが、私たちが彼のためにできることだと考えています。そして、東ティモールの人々に一日も早く平穏な生活が戻るよう願っています。

そのような意味をこめて、アグスを追悼する巡回写真展を開催します。

## アグス追悼写真展日程

1999 年 11 月 7 日(日)～20 日(土) かながわ県民サポートセンター 9F

横浜駅西口下車

11 月 9 日(火)～14 日(日) あーすぶらざ ラウンジ(地球市民プラザ)

根岸線本郷台駅下車

12 月 5 日(日)～19 日(日) 川崎市国際交流センター(予定)

東横線元住吉駅下車

・このあとも各地で開催予定です。

## 1998 年 4 月、5 月ジョグジャカルタの民主化運動

4 月 2 日、ガジャマダ大学の学生たちは、スハルト退陣を求めて、大学構内に集結した。学外に出てデモをしようとした学生とそれを阻止しようとする警察が衝突し、けが人と逮捕者がでた。5 月 13 日、再び学外に出ようとした学生たちを待ち受けていたのは警察の放水車と催涙弾だった。さらに多くのけが人を出す結果となってしまった。

ジャカルタをはじめとして、いくつかの都市で、何者かに扇動された暴動が荒れ狂った 5 月。ジャカルタでは治安部隊によってデモが中止に追い込まれたが、ジョグジャカルタでは 20 日、100 万人もの参加者を得て、平和にデモが行われた。

そして翌日、ついにスハルトは辞任に追い込まれた。



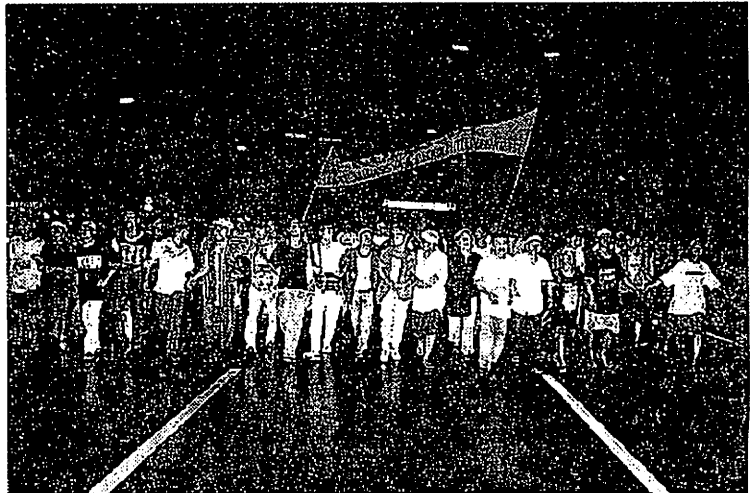
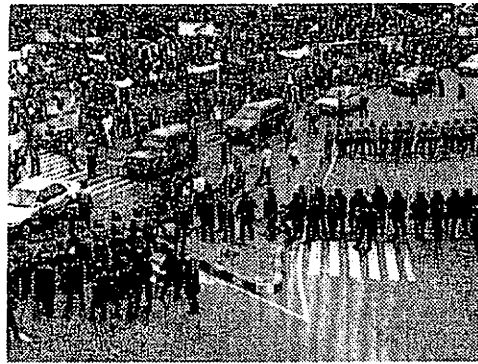
## 国民協議会特別総会阻止

1998年11月国民協議会(MPR)特別総会にあわせて、学生の運動が活発化した。彼らは、スハルト時代に出選された議員で構成された国民協議会には正当性がないこと、国軍の二重機能の撤廃を訴えた。10日、学生たちは8台のバスを連ねて国会ビルに向けて出発しようとしたが、ジャカルタ中心部のスリピで治安部隊に阻止された。

11日、国会ビルに向けてデモがスタートした。インドネシア大学の学生が運転する車が治安部隊に突入し、治安部隊9名が負傷した。

12日、国民協議会2日目、約5000人の学生が国会ビルに向けてスタートしたがジャカルタ警察の前のチャワン高速道路のところで阻止された。学生たちは衝突を避け、高速道路を行進することにした。雨の中、彼らは手をつなぎあって歩いた。

この翌日、学生10名が射殺されるスマングの悲劇が起きる。



## ストリートチルドレン



激しい時代の移り変わりの中で、犠牲になるのはいつも弱者である。経済危機以降、ジャカルタやジョグジャカルタで、ストリートチルドレンが増加した。そんな子どもたちに向けられた目に、アグスのヒューマニズムが感じられる。

